今成家写真から見える
南魚沼の文化と日本初期写真史

—— 今成家写真と南魚沼の文化展によせて ——

榎本千賀子

1. 今成家写真と南魚沼の文化展の目指すところ

南魚沼市六日町の今成家には、幕末から明治初頭にかけて撮影された写真、および写真に関連した文書が多数残されています。これらの写真は、六日町の裕福な地主であり、村役人を勤めるなど地域の指導者的立場にあった今成家の19代目当主、今成無事平（1837－1881）を中心とする今成家の人々やその近親者によって、日本で最初に実用的な写真技法として普及した湿版コロジオン法という技法を用いて撮影されたものです。

この今成家の写真コレクションは、長い間今成家の人々にのみ知られ、蔵のなかで眠っていましたが、新潟大学地域映像アーカイブによる調査を経て、2009年に初めて一般に公開されました。その後、アーカイブでは今成家の写真のデジタル化を行い、中心的な収蔵コレクションのひとつとして、研究や教育の場で活用しています。また、デジタル化した写真から新たにプリントを作成し、これまでに東京、新潟、パリと各地で展覧会を開催してきました。地域の特色とともに、当時の新技術であった写真に触れた人々の反応をいきいきと写し出す写真は、各地の来場者に驚きをもって迎えられています。

今成家写真と南魚沼の文化展より　IF-P-001-011

南魚沼市には、この今成家の写真のみならず、高橋家の大正期の乾板写真、平賀洗一による戦前の映画、中俣正義による戦後の写真と映画など、幕末から現在までの多様な撮り手による豊かな映像が残されています。そして、現在もアーカイブは南魚沼市の協力を得て、この地域に眠る映像遺産の調査を続けています。

さて、このたび南魚沼市と新潟大学人文学部は、市と人文学部の協力関係を一層強化し、アーカイブ所蔵資料の更なる活用と充実を目指して、連携協定を結ぶこととなりました。連携協定締結後は、市や学校、図書館等公共施設でのデジタルアーカイブの閲覧・公開をはじめ、これまで以上に市民のみなさまに身近な形で様々な試みを展開してゆくことが予定されています。

この連携協定を記念して、南魚沼市最古の映像である今成家写真を、2014年6月にオープンしたばかりの南魚沼市図書館展示コーナーにて紹介します。また、展覧会会期中には、新潟、南魚沼の郷土史を長らく研究されてきた郷土史家の滝沢繁氏を招いての講演会と、市民のみなさまと映像を介して語り合うワークショップを開催します。展覧会企画者である筆者はこれまで、今成家の写真を通じて日本の初期写真史をミクロな視点から捉え直そうと試みてきました。今回の展示や講演会、そして本稿を通じて、南魚沼の映像遺産を研究することで得られた成果を地元のみなさまと共有し、地域におけるアーカイブの意義や活動のありかたについて一緒に考えることができればと思っています。

2. 今成家の写真が教えてくれること（1）
——南魚沼の文化と写真の普及——

西洋で生まれた写真は幕末に日本に伝えられ、明治に入ると急激な勢いで普及してゆきます。現在の日本においては、写真はほとんど誰にでも簡単に扱うことが可能で、家庭、仕事、教育、芸術など社会の様々な分野に活用されている、ごく身近でありふれた技術であるといえるでしょう。しかしながら、自らの感覚と文化的な伝統に支えられつつ、人間が手業を通じて描く絵画とは異なり、特定の時空間における光の様相を光学的、化学的に変換することで像を定着させる写真は、それを初めて目にした明治期の日本の人々にとって、なじみのない驚くべきものであったと考えられます。また、写真の登場は、▶

私たちのものの見方や感じ方、さらには社会のあり方にも大きな影響を与えました。写真の普及期のさなかに生み出された今成家の写真は、人々が写真をいかに受け止めたのか、そして写真の登場は社会にどのような影響をもたらしたのかという、現代の写真や視覚文化を考える上でも重要な問題について、様々な示唆を与えてくれます。

今成家の写真は、新潟県内では最も早く撮影された写真のひとつであり、新潟地域への写真の普及について教えてくれる地域の貴重な遺産であるとまずは評価できるでしょう。また、この写真は地域の歴史だけに限らず、日本において写真術が実験段階を終え、全国各地で実用的な技術として用いられるようになり、限られた人々だけでなく広く庶民層にまで受け入れられてゆく過程一般を知る上でも大きな手がかりとして期待できる事例といえます。

写真1　IF-P-001-023

例えば、今成無事平は写真術を、江戸、横浜で活躍した大鐘立敬という文久年間から活躍した写真師から学び、その技術を地元の人々に伝えました。この事実からは、大都市を中心に実践され始めた写真術がどのように地方に浸透していったのか、その具体的なありようが伺えます。また、大鐘は斎藤月岑の『武江年表』などにも先駆的な写真師のひとりとして名前が挙げられるなど、当時は知られた人物であったようですが、現在ではほとんどその活動の実態がわかっていません。無事平の残した技法書や写真は、謎に包まれた写真術の先駆者であるこの大鐘の試みがいかなるものであったかも、間接的にではありますが教えてくれるのです。

さらに、今成家の写真には、地域の人々が主体となって上演する地芝居や浮世絵、江戸期の漫画ともいえる黄表紙など、江戸期の庶民層が育て、親しんだ文化の影響が色濃く見られるという特徴があります。こうした特徴は、当時の南魚沼の人々がどのような文化のなかに生きていたのかを、当時の人々の姿や表情を通じて今に伝えています。

南魚沼が生んだ江戸時代のベストセラー、鈴木牧之の『北越雪譜』には雪中の芝居の活気ある様子が紹介されていますが、明治に入っても南魚沼では地芝居が盛んでした。例えば、今成家には歌川国芳の浮世絵（図1）や先行する演劇写真を参考としながら「白石噺」の一場面を再構成したものと考えられる写真が残されており、その写真からは芝居に熱中していた当時の地域の様子が伺えます（写真1、2）。

明治初頭の写真は感度が低く、現在の写真のように一瞬で撮影することはできず、露光には数秒間と長い時間がかかりました。つまり、被写体となった人々は撮影の数秒間、じっと静止していなければ鮮明な写真が撮影できなかったのです。そうした条件下において、刀を振り上げ、片足を上げる静止するのが難しい姿勢にあえて挑戦した人々は、この姿勢を是非とも見せるべきもの、見るべきものと自信を持ち、大変な意気込みで撮影に臨んだと考えられます。

写真2　IF-P-001-033

図1 歌川国芳《岩藤浪白石》大錦三枚続、
1842〔天保13〕年（東京都立中央図書館特別文庫室所蔵）

3. 今成家の写真が教えてくれること（2）
――芝居を写す写真の新しさ――

また、今成家の写真は、当時の人々の目にこれらの写真がどのようなものとして写っていたかを考える上でも、沢山のことを教えてくれます。先に挙げた写真1、2は、役者たちの躍動的な姿勢を、わずかにブレを含んだ姿で写しています。しかも、この2枚の写真は、芝居の同一場面を写す、よく似たバージョン違いの2枚の像として成立しています。こうした写真のありかたは、当時の人々の目の前に、写真以前に芝居を描いてきた浮世絵とは、根本的に異なる前代未聞の芝居の像を突きつけることになったのではないかと思われます。

今成家写真と南魚沼の文化展より IF-P-001-012

この写真のブレは、撮影に要した数秒間におこった役者の身体のゆらぎによって、意図せずして生まれたものと考えられます。ブレは、露光の行われた特定の空間の特定の数秒間の光の状態を、光学的、化学的な条件にしたがって静止像へと変換するがゆえに生まれた、写真ならではの現象です。また、今成家の人々が同じ場面の写真を2枚撮影したのは、より良い写真を得るために撮り直しをしたからだと考えるのが妥当であるのかもしれません。けれども、よく似ているけれども細部の異なる同一場面の2つの像が存在することは、少なくとも現在のわたしたちには、写真よりずっと後に生まれた、映画をはじめとする動画を連想させはしないでしょうか。映画は、特定の時空間と結びついた断片的な映像を、複数連続的に提示することで、観客に動きを擬似的に感じさせる技術です。今成家の写真は、もちろん映画とまったく同じように観客に動きをイリュージョンとして感じさせるわけではありませんし、実際には「瞬間」を写したものでもありません。しかし、これらの写真は2枚並べてみると、結果として舞台上の別々の瞬間を連続して捉えた像が、舞台上に生じる動きを再構成しているかのように見えるのです。

浮世絵は、舞台上の特定の瞬間を再現するというよりは、「仇討ち」など物語上でひとまとまりの意味を持つ芝居の一場面を、長い間に培われた定型表現と絵師の感覚や経験を通じて抽象化して描くことで、芝居を像へと定着させてきました。それに対して今成家の写真は、演技の具体的な数秒間を光学的、科学的な過程を通じて写し出しており、しかもわずかに異なる写真が複数存在することによって、舞台上の一連の動きを再構成しています。浮世絵とこれらの写真は、全く異なる方法で芝居を再現しているといえるのです。

しかしながら、松崎晋二『写真必用 写客の心得』など明治期の写真の手引書などを読む限り、当時の人々がこうした写真像の新しさを明確な形で意識的にとらえていたと考えることは難しいと思われます。写真に慣れない一般の人々は、写真を撮る際にも浮世絵のような像を求め、しかし実際には写真が浮世絵とは大きく異なる像をしか作れないことに気付き、写真に違和感を感じていました。けれども、その違和感は浮世絵に描かれた人物と生身の人間の身体の比率や、濃淡や細かい皺などを省略して描く浮世絵と写真の機械的な描写が異なるがゆえに起こるものであり、写真と浮世絵の違いはもっぱら写真と浮世絵それぞれに表される身体像の比率や質感表現の差として捉えられていたようなのです。そして、先にも書いた通り、芝居の同一場面を写した写真は意図的に残されたとは言いがたいところがあります。

けれども、写真を撮ると姿形ばかりか精気までもが写し取られて寿命が縮むのではないか、といった当時流布していた写真に関する迷信や、写真を死者の霊魂の依代である位牌の代わりや遺影として使ってはどうかと考える開化派のアイディアは、ひょっとすると当時の人々がこうした写真の新しさを自覚的にではないにせよ感じ取り、写真に強烈な恐れや期待を抱いたがために生まれたものだったのかもしれません。▶

写真３　IF-P-001-022

4. 今成家の写真が教えてくれること（2）
――写真の新しさと「心」を写す写真――

そして、写真が目に見える姿形以上のものをさえ写し取る力を持つのではないか、という感覚を当時の人々が抱いていたことを示す事例は、ほかならぬ今成家の写真コレクション中の別の一枚にさらに明瞭な形で指摘することができます。今成家の写真には、先の白石噺の写真の他にも、甲冑とともに扇を振り上げたり、非日常的な衣装で意識的にポーズをとったりと、創意工夫に富んだ演劇的な写真（写真３、4）が多数残されていますが、その中には、豊原国周の浮世絵を抱え、山東京伝の黄表紙『人心鏡写絵（ひとごころかがみのうつしえ）』を参照して作られたと考えられる大変凝った意匠の写真（写真5）があります。

この写真からは、当時の南魚沼地方に江戸で作られた浮世絵や黄表紙などの印刷物が流入し、娯楽として親しまれていたことに加え、今成家をはじめとするこの地方の人々が、そうした江戸文化を一方的に消費するだけでなく、それらをもとに新たな創作を行っていたことがわかります。そしてさらに、写真が人間の視覚を超えて「心」を写し取るのではないか、という空想的なアイディアを読み取ることができるのです。

写真５の参照元となったと考えられる京伝の黄表紙は、西洋由来の光学技術である幻灯 ― 現在でいうスライド ― を、江戸後期の町人層の間に広まっていた道徳哲学である心学と結びつけ、西洋由来の光学技術が人の目には見えないはずの「心」を映すのだとして面白おかしいエピソードを連ねた娯楽作品です。作中では、登場人物たちの胸部に楕円形に囲まれた周りとは位相の異なる像が描かれ、この像が幻灯によって映し出された人物の「心」を表しています（図2）。見目麗しい傾城の心中を幻灯で映し出してみれば恐ろしい鬼が映り、みすぼらしい娼婦の心中を幻灯で映し出してみれば高貴な美しいお姫様が映る、といった次第です。

図２山東京伝『人心鏡写絵』1796〔寛政８〕年、早稲 田大学図書館蔵

写真４　IF-P-001-024

写真5　IF-P-001-001

今成家の写真は、西洋由来の幻灯を使えば「心」が映るというこの京伝の着想を、写真という新しい技術に適用して再解釈したものと考えられます。この写真に写る男が抱えている浮世絵には、楕円形の鏡に映る鏡像として忠臣蔵の登場人物である定九郎が描かれていますが、これはこの絵を抱える男の「心」が西洋由来の新技術である写真によって写し出された像であるというわけです。無事平は写真を題材とした都々逸に、「思ひやつれしかほうつすより　うつしてみせたへ胸のうち」という一節を残しています。この都々逸からもわかるように、無事平は写真が「胸のうち」を実際には写さないことを知っているのですが、しかしその空想的な発想に基づいて、単純な現実の反映物としてではない、ひとつの創作物としてこの写真を構築しているのです。

今成家写真と南魚沼の文化展より　IF-P-001-009

そして、今成家の写真に見られる、江戸庶民文化の影響を強く受けたこのような写真の実践は、印刷物を重要な参照物としていることから、今成家や南魚沼だけの特殊な出来事ではなく、全国的に見られるものであったのではないかと考えられます。はたして、ここで例として挙げたような写真と「心学」を結びつけ、写真に「心」が写るという発想に基づいた創作物は、明治期の出版物などを丹念に見てゆくと、今成家だけに見られる特殊なものではないことがわかります。当時の庶民向けの新聞の投稿欄や、連載小説、雑誌記事などに、写真が「心」を写すという発想に基づいた作品が数多く見られるのです。今成家の写真が教えてくれた明治初頭の「心」を写す写真のこうした流行は、当時の人々が写真をどのように理解していたかを考える上で大変興味深い事例であるといえます。

3. おわりに

写真という未知の技術に遭遇した際に、著名な写真師や学者、画家達のような専門家達は、洋書を読み、西洋の科学や芸術の知識を参照することで写真を理解し自らの技術としようとしました。しかし、近代的な学校制度が導入される以前には、西洋科学的な学問を修め、その成果にもとづいて思考することのできた人々は決して多くはありません。しかし、当然のことですが、そうした手段をもたない人々もまた、写真という新しい技術を目にしたとき、それを自分たちなりに理解しようと、自らが生活のなかで娯楽などを通じて手に入れた知識を活用しつつ、楽しみながら格闘していたのではないでしょうか。

しかも、幕末に日本に伝えられた写真は、明治に入って洋学や西洋画など当時最先端の知識や技術に親しんだ少数の限られた専門家だけでなく、専門的知識をもたない庶民にまで知られ、活用されてゆくことで、社会の中に根付き、その役割も定まってゆくわけです。つまり、写真の普及期においては、優れた先駆者や人に抜きん出た知識を持った専門家たちよりも、一般庶民が主役であったともいってもよいかもしれません。ですから、彼、彼女の理解を知ることは日本において写真術がいかなるものとして定着し、社会にどのような影響を与えたかを考える上で非常に重要なことだと言えます。

しかしながら、写真や文献等が多く残り、これまでの写真史が詳細に検討してきたのは、当然ながらごく限られた有名写真師や学者、画家たちの実践が中心でした。先駆者に続く第二世代の写真師や、地方の事例、一般庶民達の反応は、まだ十分に検討されてはいないのです。それゆえに、南魚沼で生まれ、芝居、黄表紙、浮世絵等の影響を色濃く受けながら、写真という新しい技術にふれた驚きと喜びにあふれた人々の姿を写し出す今成家の写真は、都市の先駆者に引き続く第二世代の写真師の事例として、また写真術を地方へ紹介する事例として、そして写真以前に豊かに育っていた庶民文化と写真の関係性を伝える事例として、日本初期写真史の検討を進めてゆくうえで、今後さらに詳細の解明が期待されるものであるのです。 ■

参考文献
榎本千賀子「合わせ鏡の写真論――新潟県南魚沼市六日町今成家の写真にみる写真経験への江戸文化の影響」『言語社会』一橋大学言語社会研究科紀要、第7号、2013年
榎本千賀子「『心』を写す写真――明治初頭の写真受容と『心』の道徳哲学」表象文化論学会ニューズレター <REPRE> vol.19、2013年
(http://repre.org/repre/vol19/note/01/ 2014年9月19日最終アクセス)

※本研究はJSPS科研費 25884026の助成を受けたものです。

今成家写真と南魚沼の文化展
2014年10月19日（日）－11月21日（金）
南魚沼市図書館展示コーナー